蘿鬘 上

ツタカヅラ

241

内閣文庫
和書
類
三〇三七四 號
二 冊
二〇七 函
一三 架

ツノオ 五〇八

和書門
類
三〇三七四 號
二〇九 函
九 架
二 冊

農商務省
七四九 號
貳 冊

内閣文庫
番號 和 30374
冊數 2 (1)
函號 207 241

207-241

国立公文書館
National Archives of Japan

羅鬘上巻目録

言詞辞差別の事　一丁オ
言に五種の差別ある事　一丁ウ
詞に四種二種の差別ある事　四丁オ
詞に五段の差別ある事　五丁ウ
辞に三種の差別ある事
并 靜辞に二種ある事　七丁オ
屬詞に三種ある事　十丁オ
音雑詞に四種ある事　十五丁オ
并 居言とある格

大日本帝國圖書印
日本政府圖書
明治十三年購求

音雑詞に変格ある事　十七丁ウ
変格入音須音の詞に志ノ辞をうけざまノ事　十八丁オ
同かその辞をうけざまノ事　十九丁オ
同入ハ音よりでノ辞をうけざまノ事　廿丁オ
同流音よりしか辞の事　廿丁ウ
跨續の事　廿一丁オ
てノ跨續におろえべきことある事　廿四丁オ
のノ辞に跨續の例ある事
のノ係をけてにて結たる格　廿五丁オ
のノ辞にて留りたる歌　廿五丁ウ
一段活断止段につゞる辞の事　廿五丁オ
てに種〻の格ある事
ての下に俗言にそれよりもといふほどの意を含メ
たる格　廿八丁オ
とに種〻の格ある事　廿八丁ウ
との辞をうけざまノ事　廿九丁オ
仰の事　卅丁オ
べしノ辞の事
續言段の下に残の辞の含〻たる事　卅三丁ウ
ヤし志し差別の事　卅四丁オ

しのしが差別ノ事　卅五丁ウ
ましまじ差別ノ事　卅六丁オ
さむせむ差別ノ事　卅六丁ウ
續詞段ににノ辞二ツ有る差別ノ事　卅七丁オ
なむノ辞二ツ有る差別ノ事　卅七丁ウ
断止段にやノ辞二ツ有る差別ノ事
續言段にぞノ辞二ツ有る差別ノ事　四十丁オ
連辞の事　四十丁ウ
強辞の事　四十丁ウ、
強辞のしの下をもノ辞にて受るに二ツの格有る
事　四十一丁ウ
つるぬるノ辞の下にかなの辞を含メたる格　四十二丁オ
ばノぬよりも音雑の詞のつゞく格　四十四丁ウ
やてたでノ辞の事　四十五丁ウ
けらしならしのらしノ辞の事　四十六丁オ
言を省きてのノ辞をつけたる格　四十七丁オ
ばノ辞二ツ重る時一つハ續詞段に云例　四十八丁オ
歎辞のなもやノ事　五十丁ウ
同よノ辞の事　五十一丁オ
冠辞の格の事　五十二丁オ

對へていひおくる格の事
續言段を重ぬるときハ續詞段とある事 五十二丁オ
や何とかぢもる格 五十二丁ウ
なそノ辞の事 五十三丁オ
變格奴音の屬辞を仰とひる事 五十四丁オ
續言段にむかへノ辞をうくる事 五十五丁オ
願の意のこそノ事 五十五丁オ
断れたるごとく聞えて切れたるにハあらぬこそ
ノ事 五十五丁ウ
こそノ係を伏にて結ぶ事
并 こそノ結正しからぬ事 五十六丁オ
未然段にかゝるむバノ辞清濁の事 五十七丁ウ
がてノ辞の事 五十八丁オ
べらなりとつゞく辞ノ事 五十九丁オ
志もあれとつゞく詞ノ事 五十九丁ウ
延詞ノ事 六十丁オ
二重約ノ事 六十丁ウ
古体ノ歌にむにていひさして餘情を含む格 六十一丁オ
上にいひつゝることを再いふときのノ辞に含め
て聞ゆる格ある事 六十一丁ウ

最希ニハ常の格ニ異なる居言ある事　六十二丁オ
こぬセこもとつゞく辞の事　六十三丁オ
見ゆ而しとつゞく詞の事　六十四丁オ
得の活用の事　六十四丁ウ
以上六十五條

蘿鬘 上巻

堀秀成著

言詞辞差別の事

古の歌文を玉襷ニ懸けて詞の活用辞の例格を知らむに先言詞辞三種の差別あることを心得おくべし言とハ萬物の形状を差對いふなり是に五種ありこれを世間に体言といふ又詞とハ萬事業を差繹いふなり是に四種二種あり是を世間に用言といふ辞とハ言詞を貫き連ねて言詞の相となるなり是に種々あり抑人の心の感けるはま音聲にあらはれて萬物萬

事を音の象に象しいふそを千々に轉し萬に活する
ものハ辞なりければ辞ハ言詞の精神にて言語の大
宗なりよく学び明に辨へざれバ歌よみ文かくこと
ハさらなり古書を見るにも委曲なる意えがたきも
のなり　辞といふ名目のことまこと古へ学の輩ハさらな
り他國の学にもなきを知へされバひがこと多
きよしハ典吾学則
にくハしくいへり

言に五種の差別ある事

言の五種とハ形言様言合言居言畧言是なり形言と
ハ山川木草などをすべて其形あるものを号けて云ふ

次に様言とハ春夏秋冬などをすべて其形なくとも
慥に定りて動かざるものを号けて云ふ次
に居言とハ四種の詞の活を續詞段にて云居て詞に
いへるを云ふ霞烟紅葉時雨などれ類なり紅葉時雨の類もそ
と詞なりとハ初学の輩ち諾ひがたきにことに思ふめ
れどこの類いと多し古今十五志くれつゝもいづるよ
りもことのもの心の秋に逢ふぞわびしきされなに
てもと詞あることを知るべし委しきことハ古言音
義にいへり次に合言とハ詞と詞とを合せて一ツ詞にいへる
を云ふ山川舟人春霞などれ類なり　此のときハ必下の言のもじめ戈
濁るなりされを清むときハ放れぐになりて山と川
のこと舟と人のことゝなりて山の川舟こぐ人のこ
とになる　又居言戈形言に合せたるあり居言と居言
ふぬなり

とを合せたるもあり居言を形言に合せたるハ通略
釣舟などのごとし居言と居言とを合せたるハ有明
起臥などの類あり次に略言とハ詞の活き找略きて
言にいへるを云ふ歌東淀など其類あり古事記ハ拳
鬚至于心前云云延喜式祝詞に八束穂足穂云云萬葉
集まつら川七瀬のよどハよどむともそれハよど
まず君をしまたむなどある是なり又地名も暫く言
の類にうつろふべし地名に係る辞も詞よりつゞく
ところも凡て言にいはしも異
あること
なし

詞に四種二種の差別ある事

詞の四種とハ四段の活一段の活上二段の活下二段
の活是なり又二種とハ變格音雜なれなり此の二種
種の類にハいひ おたきゆるあり　ハ上の四
故別にやゝ二種まゝふなり　けて四段の活とハ
あいうえの四韻の段に涉りてか か き かく かけ さ
け さし させ たゝ たち たつ たて などのごとく活
くをいふ次に一段の活とハ伊の一韻の段にかれの添
りて み みる みれ き きる きれ などのごとく活くを云ふ
次に上二段の活とハ伊宇二韻の段にかれの添りて
おき おく おくる おくれ おち おつ おつる おつれ など

のごとく活く哉いふ次に下二段の活とハ衣于二韻の段にわたれの添りて あけ あく あくる あくれ あけよ あける あけれ など其ごとく活くを云ふ活てまた変格詞とハ上ノ四種の詞の例に変ふるをいふなりて ハ久音来といふ詞ハこ き く くる くれと活くハ上二段（活く中にも き く くる くれと）の活ざまなれバら上に於の韻のごノ音に活くが則変なり凡ての活用の於の韻まてハ及ざるがおのづからなるをおもふへし凡て於ノ韻まて活用きわおよびさることとハいともく奇しく妙なる理りあることにてそのよしおのがかける活用本義考にいへるを見て知るべし又須の音の為と云詞ハ せ し す する すれ と活く中にて せ す する すれ と活くハ下二段の活ざま

ながらしの音の活の加へしたるが則変なり又奴の音の去と云詞もなに ぬ ぬる ぬれ ね と活く中にて ぬ ぬる ぬれ と活くハ下二段の活ざまながら な に ね の三音の加へしたるが則変なり又流音の有といふ詞も ら り り る れ と活く中にて ら り る れ と活く四段の活ざまながら断止段をりノ音に云が則変なり次に音雑の詞とハ万の有形の活を云ふ本を音雑といふよしハ都て何れの活も久の音ハ久の音の一行須音ハ須音の一行にのミ活きて外の行を一音も雑へざるものなる哉さの活を仮令バ善といふ詞ハ よく よし

よきよけれと活く中にてくきハ久音なるを志の音
須音のの雑るが則音雑なり音雑詞の久活志久活の
行なり外に以久活太久活とい
二種あること
ハまたいふべし

詞に五段の差別ある事

詞の五段とハ未然段続詞段断止段続言段已然段これ
なり未然段とハ将に然せむとする意に又然せざ
る意をかねたる段なりされバなむだやなどの辞を
かくるときハ願の意となるゆゑなむかさなむゆゑ
だやかさだやなどのごとし次に続詞段とハ必次の
詞につゞく仮令バちりゆく云々おもひわび云々などの
ごとし又其段の辞をもつくる仮令バちりぬる云々思
ひつゝ云々などのごとし次に断止段とハ活定りて切る
なり又其段の辞をもつくる仮令バちるらむ云々思ふ
とも云々などのごとし又もにをバばの結ともなる仮
令バ花もちる人ハおもふなどのごとし次に続言段
とハ必次の言につゞく仮令バちる花の云々思ふ人の
云々などのごとし又其段の辞をもつくる花とのこち
なたにあるを云々人を思ふのなかなどのごとし又のが
ぞやかれ結ともなる仮令バ花ぞちる人やおもふな

どのごとし次に已然段とハ未然段の表裏にてど。ど。や。れ辞をうくる時は已然なることくなる仮令バ未然段にて花さかばといへば咲かむを見に行むなどいふごとくなるをこれ段にて花さけばといへば咲けば人のとひくるなどいふごとくなるにて知るべし又こその結ともなる仮令バ花にこそちれ君我こそおもへなどれごとしさの五段は四種二種ともにすべて然ありこは五段十五等れ圖に合せてさとるべし

辞に三種の差別ある事
并 静辞に二種ある事

辞の三種とハ動辞属辞静辞是なり 動辞とハ未然段につく辞にてハず。ず。ず。ぬ。ね。む。む。め。ませましくましましましか。續詞段にのかる辞にてはけきししかと是の四ッなり。次に属辞とは四種二種の詞の活きざまに專ら同じくて續くところも受る辞も都て詞のごとくなれば何の詞属とて則下二段牟、音の属变格流、音の属下二段都、音の属変格奴音の属四段不、音属

同牟音属

音雑久活の属同志久、活の属是なり 次に静辞とハ言

詞の下を受けて動くを云ふ是にも上の係にな
ると下の結になると二種あり係になるはもにをは
ばのがぞやなこその十一なりその中もにをはばよ
りのがぞやなれ方重ければこれ二ツの重なるときは
のがぞやなれ結にしたがふべし又もにをはばにこそ
その重なるときはこその方重ければなをこその結に
したがふべしのがぞやなとこそと重ねたるは誤な
り一首の中にてのがぞやかの結をとぢめてまたこそ
そのかゝりてたるは一首の中にも例あることにて
くるしからず次に結びに成る辞は動辞并属辞は四種の詞
と同じく玉襷の図のごとし静辞の方は添紐の図によ

りてあるべし其うち初学の輩はたど〳〵しかるべき
を二ツいちむまづらしの辞はもにをはばのがぞこそ
その結になりてやかの結にはならずやかの結にらし
しを用ゐたるもいと誤なり詞玉緒にや何などの結
にはらむのみおほくしてらしはいと〳〵稀なり後撰
にこひ〳〵てあはむとおもふ夕ぐれはたなばたつめ
もかくやあるらしこれも一本にはかくぞあるらし
とあり云々今按ふにいとまれ〳〵に見えたるはおほと
ぐく誤にて後撰なるも一本は方正しきなり玉緒に
や何の係りてらしと結びたる證とて引れたるは新

勅撰一首後拾遺一首家隆卿家集一首新千載一首合せ
て四首見えたれどもこれら何れも末の撰集や又家
の集などにて古今拾遺にたぐひたるがこれかれすくな
ねどされらハいづれも證としがたしらし本つ意を
おしあきらむるときはやかなどの結びに用ふべき辞
にあらぬことおのづから明なるそのをやくはしく
ハおのが著せる助辞音義考にいへり　すべていづれの辞をもその
本つ意を明かに極めざれバ末の撰集などの用格の
違へるがまれ〳〵に見えたるをもそれやがてひとつ
の格のごとく思ひまがへていとも〳〵たど〳〵しきわ
のぞ必その本つ意より極むべきことなりこれらわ
ことハおのが学則また神代の
半都々に委しく論ひおけり

もにをはばの結なるを
古今　たつた川もゝぢ葉流る神なびのみむろの山に志ぐれふるらし‖
同廿　みやまにはあられふるらし‖外山なるまさきかつら色付にけり
ぞの結なるハ
後撰　なでしこの花ちりがたに成にけり我待秋ぞちかくなるらし‖
こその結なるハ
古今　ぬき　みだる人こそ‖あるらし‖白玉のまなくもちるかそでのせばきに
未然段ヲ受るがの辞ハ‖ぞあらまし‖の約なれバもにをぞこのが
むばの結ともありまた言にもつゞく格ありそがの
轉れるなりといふ
説もいとよろし

もにをてはの結あるハ
古今西君こしバねやへもいとしこもにけき我え玄に雨ハおくとも
日　こひしなでたゐ名ハたゝじ世中のつねなきものといひハなしも
言ゐ　としけるハ
後撰五　白川のたきみいとみまほしけれどみだりに人をよせじものをや
この外例いと多し

屬詞に三種ある事

屬詞の三種とハ下二段須音の屬詞同流音の屬詞変格流音屬詞是なり下二段須音屬詞とこれ四種の詞の

未然段より下二段須音の活に轉りて他に然せさせる意となるこれにまた二種ありそは四段より轉りたると一段上二段下二段変格より轉りたるとの差別あり四段の活よりうつりたるをはせはれの約りてせれとありて未然段のかはたはまらよりせさせれと轉るなりたとへバかくさせハかくせかくさせハかくせかくさせハからせからさせハからせなどのごとし次に一段の活上二段の活下二段の活変格の詞より轉りたるハ約まらず其儘はせはれとなる一段にていもバ未然段のきみひいおよりさせさせ

変格ノ詞久音ハ上二段ノ変格須ノ音ハ下二段ノ変格奴音ハ下二段ノ変格あれバ約りて轉り流音ハ四段ノ変格なれバ約りて轉るなり

さしる　さしれと轉るなりたとへバ　きさせ　きさきに
させ　さし　などのごとし但し変格四行の中有居の
活詞のしハ外くわぬの三行の格にハ異ありて四段
の格にひとしく　あらせ　あらし　あらしる　あらしれと
轉り活くなり　一段の活の　見せさせ　などいふ詞のあ
るハ見より変格の為の詞のつきて
見せとなりて夫より再轉りて　させと
いへるなりこハよくきこえおくべし余も準へて知
るべしこれハ何れも萬葉に令の字をさけて次に下
二段流音の屬詞とハ前のごとく四種の詞の未然段
より下二段流音の活に轉りて自ら然せざる意他
に然せらるゝ意を兼る詞となるされにもやゝ　二種

四段ノ活を轉るに約り外四種の活を轉るに約らぬこと別なるべし

ありそハ四段より轉りたると一段上二段下二段変
格より轉りたるとの差別あり四段の活よりうつせ
たるハられらるの約りてれるとなりて未然段のか
たはまらより　れ　る　るれと轉るなりたとへバ
かしられハ　かれ　かしらるハ　かる　かぶられハ　かれ
ぶる　などのごとし次に一段の活上二段の活下二段
の活変格の詞より轉りたるハ約まらびて其係られら
るとなる一段にていをバ未然段のきにびみいゐよ
り　られ　らる　らるゝ　らるれと轉るなりたとへバ　きら
れ　きらる　みられ　みらる　などのごとし余も準へて知

るべし是をハ萬葉に所の字をうけてはてこの屬詞
三ッの活をひとつ詞にていふときハ産といふ詞を四段の
活半音にてうまうみうむうめと活くハ然する意に
て母の子を産むにいふことなるに下二段須音の屬
詞に轉りてうませうませるうませれと活く
ときハ他に然はする意となりて父の母に子を産ひ
るを云又下二段流音屬詞にうつりてうまれうまる
うまるゝうまるれと活くときは有ら然ある意とな
りて子の母より産るゝを云ふなれにてよく〳〵弁ふ
べしこの屬詞ハよく〳〵心にとめおかざれバ誤ることと

おほきものにて世に歌よくよみ文めでたうかける
とゆるされたる人すら此誤をきよくまぬかれたり
と思はるゝハをさ〳〵見え侍つねに上のくだりをも
ふに味ひてその正しきとあらぬとをあきらむべし
はて此つひでにせきおへおくべしその詞の八衢ハ
ことばの道の志るべの又なき書にしあれどその中
さうつくいまだしきことゞもあきなしもあらず又そ
ハおのづからかけたる詞の八ちまたに補正にくはしく弁へお
きたりおほ文の学ハさらなりすべてことばの学やむ
人ハこのふみ必ずよみ然云ふハおのづをしへ子礼限を
この屬詞のきたにいとりてハ猶おほく〳〵しくて上巻
に佐行下二段の活詞とてあげたるつぶにせさしける

と此を一の詞と挙られたるハ誤なり必ひゝさひゝる
と二つに出しおくへき也なり枕冊子三月三日頭の
辨柳のりつくをセ。さセ桃の花ゟはしにはゝセ櫻こ
しにさゝセなどしてあてなセたまひしを云とある此
中セさセのセハ為にて変格の詞なればさセと受け
さゝセのさゝハ四段の活なれバ。（のセと受けあてゝセのあてかハ四段の活なれバ）おなじくセと受た
りおなく一つへき此文に此けぢめいとよくあられて
見えたるをや猶いちぢ宇治拾遺十ノ巻に主上御笛を
あそばしけるがやりゝ調子をうつてふかセ給ひけ
るにこゝ明暹調子異にこゑたがつひあけりけれハ云云

御笛残たびてふかせられけり」とありこれ初のふか
セ給ひけるハ敬ひ詞にて延たるなり後なるは明暹
をしてふかしめ給ひけるにていさゆる他を然セさ
しむる詞なりされバにて委しく心うへし又此属詞の
中に一種あり下二段流音の属詞より同由、音に再び
つゞけたるなりそハ四段の活の思ふといふ詞の上乃
ごとく下二段の流音なるうつゞておもちれ おもちる
となりたるをおもちれのちを一音相なればほとな
り五十音の分生るし順ハウオアエイといふ順なれ
バそれにちとがひて此ノ行もつホハへヒといふ
が生るし次第にてバをれを韻にて一韻相なれハ元
一音上ゟ移る時ハほなり

とありてこの音韻にて知らる例ハ二音の中にて上
につく音ハ必竪にウオアエイの順にした
がひて何れの行りも一音上の方によりつきを音にて
知るといふなり下につく音ハ必横に何れの行も一韻
にしめれ方にうつきを韻にて知るといふなりこれ
上につく音ハ竪に下につく音ハ横に行ハしむるれ
二音を一音に切る例に同じこれらのことハそへ
ておのが著したる五十音分生図説に委しくいへる
を見てしおもたれハおもほえとありおもはるのぱ
るべし
ハ同じくぽとありかを一韻知ふれバゆとありてお
もほゆとあるそれるるれのそハ望ておもほえおも
ほゆおもほゆるおもほゆれと轉り活くあり又一段
の活の見といふ詞の上のごとく下二段流音にようつ
望て見ふれ見ふるとありそのられの約りてれとな

りらるの約りてかとありそのれかをもし韻にて知
へて見え見ゆとある此の二つとも則下二段活由音
の屬詞あり万葉に所射完とあるハ書紀に以由之々と
あるによりてイユシヽと訓むべしさてこのいゆし
しハ射ふれたる猪鹿をいへるにていふれのいハ一
段の活の由音にて上のごとく下二段流音に轉りて
そのらるのるを約りたるを韻にて知へてゆといい
へるなれバこれらハ見えの格に異なることなし次に
変格流音の屬詞とハ四段の活なる音雑詞の續詞段
より変格流音に轉り活くあり（外三種詞よりハ轉る例なし）四段の

活より轉れるハ續詞段のきしちひみりの音までの
辞のかゝりてハ変格流音の有といふ詞につれるな
り久音にてハかきてあらむかきてありとえをきて
の約りてけとありあノ畧かれて　本音アイウエオの
五音ハ中ふにある
ときハおのつかけふむかけもとあるなり須音にて
うら畧かる
ハかしてあふむかしてありといふを志ての約りて
ぜとありあの畧かれてかせふせかせりとあるなり
余ハ準へて志るへし　されを世に四段の活の已然段
のけせでべめれよるうつせた
るとさてろえひずめたる人のおほきハいみしき誤
なりそハ續詞段のきしちいりとての辞とつゞま
りておのづからけせでべめれと成れバ志のおもひ
誤れるものなり　然れども万葉に両有の字をつける

なても又式詞の意をおもひても續詞段までの
辞のかゝりて約れることハ決なきものをや　又音
雜詞より轉れるハ續詞段のくしくの音より変格流
音の有といふ詞につきて久活にてハよくあふせ
よくありとえをくあノ約りてがとなりてかふむか
りとあるなり　志久活なるも
これ異なることなし　これハ萬葉に有の字
をかけて凡てこの傍詞のことハ玉襷添紙にあげた
る図に合せ知ふべし

音雜詞に四種ある事並居言とある格

音雜詞の四種とハ玉襷にあげられたる久活志久活

の外に尓久活多久活と云二種あり合せて四種あり
尓久活とハ仮令ハ遥けくもなけしもなけきもなけ
れのとけくのとけしのとけきのとけれと活く
がごとし多久活とハ仮令ハうれたくうれたしうれ
たきうれたけれめでたくめでたし（めでたき）めでたけれと活
くがごとしはて久活のくしきけれを省きてハさと（みとなり志久活のくしきけれを省きてハ）
但しこれハ互にかよひもするありすべて
あるこれらのことハ別に図にせざるそのあり又け
く活ハかとある仮令バ久活にてハ月きよみ山高み
志久活にてハうれしさのなしさ尓久活にてハなら
がのどのなどれおとしいづれもかくなるときは言

の格となりて辞も言の辞のかゝる格なり
古今もりくへも空にのこしてふることをハ我なる山の風をやさしなり
はてやまと音雑詞を居言といふに久活志久活によりて
て差別あり久活ハ畧言にして言に合ひ遠山廣野清
滝川短夜の類なりこの活を重ぬれバ志久活となるなかくし夜とをくし越などのご
とし志久活ハ断止段をもて居言とひもなし煙なかくし
夜同し心さなし女くハし妹の類なりさて又なしく
いふ詞のしハ久活なれども志久活の格にひとしく
断止段をもて居言とはそハ友なし千鳥間なしかゝる
まなど此類なり又古事記にさひなしにあハれ古今

とゝむべきものとハなかしに同ほとゝぎす我とハなか
しになど言の辞のかゝりたるもなかしにて云居たれ
ば言の格とありてに辞のかゝれるあり又あたらし
といふ詞とむなしといふ詞のしハ志久活なれども
久活の格にいとしく畧言にして言に合せる格あり
そハ古事記にあたらすが原書紀にあたらたくみ曰
あたら墨縄後撰にあたら夜の月と花とをと云又む
なし此方ハ万葉にむなで源氏にむな車など此類な
り但しむなし方ハ猶断止段をもて云居たるもあり
そハ古事記にむなし舟古今にもむなし煙などいへり

あたらしの方ハ必畧きて言に合せる格ありけて又
このむなし煙なかゞらし夜など此格を言幸舎翁も活
を省きて言に合せたるなりといをれどもうべ
なひかとしおのれ考へえたるさとあそて居て言に
合せたるとは委しくハおのが著せる活用本義考に
いへるを見て弁ふべし　又なしにといふ詞ハマアと
諺訳して見れバよくきこゆ
るなりと義門がいへるハよろしく古今にとゞむべき
ものとハなしにもあなくもちる花ごとにたくふこ
ゝろゝ同ほとゝぎす我とハなしにうれ花のうきよ
の中に鳴たるら世ゝ万葉にみよしのゝ青根がみね
のこけむしろたれかをりけむたてぬきなしになど
みて志
るべし

音雑詞に変格ある事

なこしと云詞ハ音雑志久活になこしくなこしなこ
きなど活くべき詞と見えて字鏡に佰小負須古志
支奈留とあるにても然おもはるゝ我古きものに却
こしといへるれしいとおかくてすこしきなこしく
とやうにいへるハをさく見え変さてうく活く詞ど
もハなべて詞つゝ何志く何と連く、定りありそはた
とへバむなしくなくびたのしく見るこひしく思ふ
とやうにいふ例あり然るに源氏桐壺に女みこハな
こしなくし給へる帚木になこし見なや夕良になこ

し物の心を思ひ志るといへるなどを考ふるに此少
しといふ詞ハ其例たがひて聞ゆるあり又辞のこしも
でなどを断止段よりいひつゞくるも外の志久活の
例に同しうふ変帚木巻になこしバ見せむ同巻に却
こしでかとアもやせなと皆異あり故今この詞を音雑
詞の変格として別に一種に定むるなり　この説ハ大方山口栞に
いへるをいさしのいはれなし
ていまゝてにいつるあり

変格久音須音の詞に志ぐ辞のけざ汲の事

動辞の中にてけ却き却志却うと活く辞ハ四種の詞とも

にそへて續詞段にかゝる辭なる故變格久音須音の
詞のみ未然段にうつりて久音ハこし‖こしか‖須音ハ
せし‖せしかといふ例あり　この詞きし‖しか‖と活く　うちきしの二つハ猶こと
なることなく　但し源氏物語榊巻にまたるゝ
續詞段にかゝる　方なく
きし‖方も末なといへる類のまれ〳〵にハなきにし
もあらず又後拾遺五の詞書に九月の十日あまりなるあ
りつきなかりつるまで人々ながむるにきし‖方行末
もかゝる夜ハあらじなといひてよみ侍りけると
あるも同し　然れと大方ハこし‖にしとつゞくがつねなり
須音の方にハせし‖とつゞきたるハたえてなきこと

なくまべてせし‖とつゞきたるも　言幸舍翁の説にきし‖方などつゞきたるが
かなおきけれものに見えたるも　もと来しとかけてけ
むかし後に写しとき来をきゝてよみてきし‖とかきひが
めたるにてすべてきしとつゞくことハあらぬ格
となんこゝろえおくべしといへれどさることにも
ある
べし
古今　人ふるす里をいとひてこし‖かども奈良の都もうきなゝりけり
同　今こそあれ我もむかしハをとこ山さかゆく時もありこし‖物を
同　花のいろハうつりにけりないたづらに我身よにふるながめせし‖まに

同なその辭うけざまの事

句の意なる知なそといふ辭ハ四種の詞ともすべて續

孝 漢音キヤウ次音カウ
呉音キヤウ次音コウ

詞段にてまて四段ノ活にてハけふハなやきそなき
なちふしそとやうにいひ下二段の活にてハ人なと
のめそころなきかせそとやうにいふへき格にてそ
れに準ふれハ変格久音にてハなきそといふへきを
さハいもでなこそといふ格なり宇津保後蔭にこれ
孝の子なりハ氷とけていをいでこ孝の子なり云ハ
なりいでこそとて泣くと見えたるにてあるへし須音
にてハなきそといふへきをさハいもでなせそとい
ふ格なり為と同し活なる些しもこれに同しくなおも
になおもしそといへるがそもし格なり些るを世の人文章など
えゆるハいともいみしき過なり同巻に天狗のいる

なこそあらめなおもちせそと見えたるにてあるへし

同久音にての辞のけざ波の事

静辞なるすての辞ハ四種ノ詞ともにすへて續言段に
なころ辞なるを四段の活にてハはちくおそちをすそ一段の活にてハ見るやそいるなて
なといふへき例なり変格久音の詞のミ断止段にてそて
きてといふ格なり万葉にりつてくおでといつるハ多
し凡て変格詞ハいもゆる常非格に変なる詞なれハ
辞のけざやものつから常にことなる
りと知るへし

變格流音につゞく辭の事

變格流音の活なる有といふ詞ハ四段の流音の活に同くて断止段をあり‖といふか則変なり然れども断止段の辭ハ凡てあり‖といふ方なるのことかくてあり‖の方にハど并や（切なし）（やなり）の二つのことかくなる格なり但してふハといふ‖の約なれバ‖といふハちふと‖つゞまりそのぢをでと轉したるなどの例にてあり‖の方にかくるざり‖たりなりふりどすべて此の詞の屬辭も是れに同しくと‖や‖て‖ふの辭ハ也にかゝりてその余ハすべてなの方にかゝると知るべしこハよく弁へおかざれバ紛らはしきことあてちくろえおくべし

跨續の事

跨續の格ハ動辭にてハ下二段都音の屬詞なるて‖と未然段の辭のむ‖と二あり詞にてハ音雜詞のく‖静辭にてハつ‖を‖むの三ッなりおちすべて詞のうへにてハ次の言につきたるがごとくにて其意ハ必次の言を跨て詞のところまで及ぶと知るべし此格古文にもをりをりあることにてその例をひとつふたついはバ出雲國造神賀詞（イツモノクニノミヤツコノカムヨゴト）に百八十六社（モヽマリヤソマリムヤシロ）に坐（マス）皇神（スメカミ）等（タチ）乎（ヲ）某甲我（ソレガシガ）

弱肩尓太襷取掛天云云志都宮尓志都米仕奉氐とあ
りまたは皇神尓某甲我云云とハつゞけ某甲我云云の
文段またきて志都宮尓志都米仕奉とよふ所へつゞ
きたり又同文ニ天能八重雲乎押別氐天翔國翔氐天
下乎見廻氐とありこれも翔氐天下とハつゞけのじ天
下をめぐらしきて翔氐見廻とつゞきたるありされバ
てしるべしかゝる格あることをさまざまにさとるべえ
おのざれバ古文ハ心ゆきがたきことおほしされバ
はじめに言語の格をよく学び明らに弁へざれバ古
書を見るにも其細なる意のがたきものぞといへる

ハこれらやがてその中廿一つにハあらざらし
ての跨續あるハ
古今 きのあるなく秋のたき原紀立ちて旅ゆく人をいろとうかさむ
同 よひくにぬきて我めるりを衣うけて思をぬ時のもなし
同 人やそ廿なかなくに大うこハいきうしとひていさうつをあも
びの跨續あるハ
古今 山たみつねなうしれなく思ハあわびもあへび花ぞちりける
同 天の川雲のみ水脈てまやれバ光をとどめび月のあがるし
くの跨續あるハ
古今一 北へくと仰なかしをれバ蕾丹なくなること意を紀なくきく

同　たび人のゆきて立よるこのもとハおもひかけなく紅葉ちりけり

ロ　アトニ入

万七　石上ふるの早田をひでずともなはだにはへよ守つゝをらむ

同一長うたのよろしく遠つ神我大君のいでましの山こし風のひと
りをる吾衣手に朝夕にかへらひぬれば云云

てい蹲續あるハ

古今　秋を寒みおく初霜を拂ひつゝ草の枕にあまたゝびねぬ

同　音羽山おとにきゝつゝ逢坂の関のこなたにとしをふるかな

をの蹲續あるハ

古今　ぬれてほす山路のきくの露のまにいつか千とせを我ハへにけむ

同　とふともなきこゑもきこえぬおく山のふかき心を人ハしらなむ

ぞの蹲續あるハ

古今　志ら玉と見えし涙もとしふれバから紅にうつろひにけり

同　久かたのあまのかはらの渡守君渡りなばかぢかくしてよ

同　志ら雪のところもわかずふりしけバいはほにもさく花とこそみれ

アトノコノ次ニ入

一段活断止段にうつし体辞の事

詞八衢上の巻ニ云云るもじをそへてきるゝ詞とつゞ
く詞とをこゝねたるハ後の定にてふるくハ万葉十一
春野のうはぎつみて煮良志毛又古今花とや見らむ
六帖　松の枝のときはなる似べき後撰まで見べきゝ人も

ありしな土佐日記に似べきなど見えたる義門云後の定めといひすてたるはあかぬといひざぬなりこれなもじをそへてきるる詞とつゞく詞をかねたるはまた大方の定めながら古くより後まで万葉子春のれうをきつらして奥良志も云云ず二の音をば「べきら」む」など見たるもまゝ少からず見しやうにいひたらむぞよかるべきといへるによるべし然れどもこの断止段になもじをそへていへるとそへざるとにつき辞の受方に二つの差別ありそはまづ四十段になるもじをそへていへる方は断止段の辞をすべてうくる例なるをなき文字をそへざる方は断止段の辞のうちにて「べき」「らむ」とらし」の四つの辞のこかゝりてその外の辞はかゝらざる例なり玉襷添級の図に合せ心得べし

「て」の接続に心得べきことある事

伊勢物語十九段に昔をとこやまとにある女を見てよばひあひけりさてほどへて宮づかへする人なりければかへりくる道にやよひばかりに楓のもみぢのいとおもしろきを折て女のもとにみちよ

りしひやらこれなハほとへでとあるでの下に宣づ
くへあるといふ詞ハあれどこのぞるといふ所へは
つゞうじしてくへて来るといふ詞につゞけてこの
類くなつゝをば等ね蹉續するも例あるよくしるべく
えおくべし

のノ辞に蹉續の例ある事

のノ辞の蹉續ハ前にいつるでくばつをばなどの
如く必言我蹉きて詞につゞくに限りたるにハあらず
ば古書の中にもをもく蹉きたる例あるありそら万

詞花
風をいたみ岩うつ浪のおのれのみくだけてものを思ふ比かな

葉十に心なき秋の月夜之物おもふといのねられぬる
吹てつもとふ出雲國造神壽詞に高御魂神魂命能
皇御孫命尓天下大八嶋國乎事避奉之時後釈云この
事避奉へうる辞にして皇御孫命へ事避ハ次なる
つゞけいふ能にハあらじといへれど遂に鎮火祭詞
に吾名姊乃命能吾乎見給布奈止申乎吾乎見阿波多
志給比津とあるかごとしこの外猶いと多し

のノ係をけりて結たる格

のノ辞ハのがぞやかノ係辞の中にてハ最軽ければ
もにをはばの係辞の類にも通ひて結をけりといひ

てけるといをざるがあり
新古今三　ひとりぬる身にしみだれ山のはにあかでも月のあさふきにけり
金一　ちるもうつろふけしきは空のこてさして花には袖のぬれぬなりけり

のノ辞にて留めたる歌

のノ辞にて留めたる歌は大方上にかのかなにて切れたる下にあることなり　さらぬもやれしるはあれども　そはとりひあしきとの
なり
古今五　ふきまよふ野風を寒み秋萩のうつりもゆくか人の心の
好忠集　おもひやし駒の春よりあさましにつきせぬものかなとおもひこしもの

源氏蛍　あらはれていとどあさくも見ゆるかなあやめもわかずなかれけるねの
栄花　とくとだに見えばあるべき冬の夜のうらしく袖に結ぶ氷の

△マヘノコノ下ニ入

てに種々の格ある事

てノ辞の下に言を含めたる格あり
これ歌にはなくとも古き文にもをりをり見えたる格
にて大殿詞に天津金木手本打切末打断氏千座置座
尓置足波志氏とあるは本打切末打断氏千座置座尓作
利其千座置座尓置足氏波志といふ意にて打断氏とあ
るての下に千座置座尓作りといふ言を含めたるなり

天津金木を云々ハ置座ニ作らむとの料なり次の千
座置座ニ云々ハ秡津物を置足ハしことなれハその
間ニ置座ニ作るよしの言のあるべきを
氏の字の下にふくませて聞せたるなり また祈年祭
の祝詞に遠山近山ニ生立留大木小木乎本末打切氏
持参来氏云々とあるも打切氏とある下に中間乎と
いふ言を含ませたるなりされバすてきるへし 歌に
ハ
古今 おとにのみきくの白露よるハおきて[口]ひるハおもひにあへずけぬべし
同 月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつハもとの身にして
古今 白雲のこなたかなたに立わかれ心をぬさとくだくたびかな
てを含メたる格あり

同 立かへりあはれとぞおもふよそにても人に心をおきつ白浪
てる言の辞のかゝる格あり
古今 梅花さきての後の身なれバやすき物とのみ人のいふらむ
同 吹風にさきたつ浪なれや逢ことなきにやまきこえ立ふむ
同 よそにのミあはれとぞ見し梅花あかぬいろかハ折てなりけり
とて‖ので
とて‖ので‖ハて‖の上に心詞をふくむ格にてとて‖
の方ハいふ‖おもふなどの詞を含みて「といひて」とお
もひてとあるなり又にて‖の方ハ心変格の詞なる為‖
といふ詞を含みてしてとあるなり

古今 さくら花ちらバちらなむちらずとてふる里人の来ても見なくに

同 今ハとて別るゝときは天の川渡らぬさきに袖ぞひちぬる

同 花の中目にあくやとて分けゆけば心ぞともにちりぬべらなる

拾遺 ゆかぬみなどとせむとて何さまにまどはしき人に云々

古今 久方の雲の上にて見る菊は天つ星とぞあやまたれける

同 白雲の八へにかさなるをちにても思はむ人に心へだつな

拾遺 春日にも海遠にてよましゝのバ云々

てより上へ意のかへる格あり

古今 いで人ハことのみぞよき月草のうつし心ハいろことにして

万葉 よしのなるなつみの川の川よどにかもぞ鳴なる山のかげにして

てゝ下に俗言にそれよりといふほどの意を含たる格

ての辞ハ語勢をゆるめて上の意を下へおくりてつくる意あれバての下に俗言にまよりてといふほどの意を含ませたるのありそハ鎮火祭詞に國の八十國嶋の八十嶋生給比八百萬神等生給比氏麻奈弟子尓火結神等生給氏云々古今に見えたる柳さくらをこきまぜて都ぞ春の錦なりけるこれらハての辞にて語勢をゆるめて下にあハれと含めたるこの類猶多し

とに種〻の格ある事

のがぞやかノ係をそのなかさまれる結ミて結ひたる
下ナどの辞をつゞくるときハ下その結よう〳〵ハふ定
後撰 とがやとなあみれの花のおほのれハきやどる人やあれどもまたか
拾遺 君をはとおもるゝぞなけれども恋ハ物やおもふと人のとふまで
どの辞ハすべて断止段を受る格なるを音雑詞ハ
續詞段にもどノ辞うける例ありたとへハ遠くとも
近くとも なとれことし
この外いと〳〵多しまた詞を省きて意を含めたるも
古今 いつはとハ時ハわかねど秋の夜ぞ物おもふことの限なりける

源氏桐壺 はじめよりも我ハどおもひ給へる人〻めざましき
ものに云云
ある彼と是と二つれことをいふ意あるあり このど
ハ與の意ナて續言段につゞきてつねのどに異なり
このどハ暫く様言 このどれことハ詞の玉緒ニ見
の類とさしおくべし
えたり
拾遺 同じのうちにふたつひ物をおもふなるとく明めるどおそくくるとも

との辞すみざるノ事

とハすべてかれる所をつくる辞なれバ必断止

段を受べき辞あるを後世の歌文に續言段を受たる
がをゝもく見えたるハいみじき誤ありよく心せされ
バ例格をあやまることあり　ぞの意ハ委しく助辞音義考にいへりよりて辨
じふ゛仮令ハ某の山をこゆとてといふべきをこゆる
ぞてとあやまりとしぞふぞてといふべきをふると
てとあやまりしよのあくぞといふべきをあくるぞ、
あやまりくれぬぞエといふべきをくるゝとてとあ
やまる類いとおほし此格古へのよき書ハさらなるを三
代集の比までハあやまることたえてなかりしを
此より後の世のみハやゝもすれハあやまれるがお

ほく見えたりつれ〴〵草などにこの格をあやまれる
所ことにおほし同心つきひせらるしとこそ作られ
れこれハせふるどこそとあるべき所なり　同ぞかりになりてハとびお
ろ〳〵ぞもおほなかりとあるべきところ　これハおるども同ほもるどもやさし
いれじこれハほむどもとあるべきところ　同人に酒なるもすゝどてこれハ朝
なむぞてとなの外なかいとおほし　このつれ〴〵草の
あるべき所　詞のむ備るいをれたるぞの辞のあやま
れることハそのをしもけるなり
をこしにその

御の事

御とハ此方の意を彼方に云御なるよて世に下知と

いふ是なり使令希求など名目をたてゝいへる なれ
もあそいづれもおなじことなり
に四種二種の活によりてはたまさあり四段の活に
ハ已然段のけせでへめれを其倭仰としていつくに
ゆけ何をいさせなどいふなり又これによ文字をそ
へてゆけよいはせよともいふ例あり宇都保物語蔡
使にもものなんどたまへよ円菊宴きこえまつれよ源
氏物語うつせみノ巻あひおもひ給へよ大和物語百五十九
段ふみハよくも見給ハせじ詞にてやせよなどなふあ
るべしこれらのしかく例をあげつるハ詞ハ衢に四段
の活にてハ未四の音けせでへめれをそのま
まにてさけてさせおもへなどいひて即下知の詞と
なるとのみいもれてこれによ文字をそへても

いふことをきらぬ人おぼゆるれバかく 又一段の活上
例證を引きておどろかしおくなり
二段の活下二段の活にハ續詞段によ文字をそへて
仮令ハ一段にてハ見よ居よ上二段にてハおきよお
りよ下二段にてハうけよあてよなどこれごとしやう
変格久音にハ未然段の詞を其仮にいふ仮令ハこでこ
ふに似たれどとめ詞のしなどこれごとし このてふのし
を受る の辞ハ仰の下
辞なり なするよ文字をそへてもいふ人ハ詞よなどの
のごとし これにやうよ文字をそへたる例あるハ四
段の活にて已然段を其やうに仰とせるなる
へての格なあらそれに又よ文字をそへたる例もある
がごとしと知るべしこれらのことハ詞八衢補正に
いへるを同須音にハ未然段によ文字をそへてせよ
見るべし

といふ格あり　但し古くハまれ〳〵によをそへざるも
ありそハ万葉十まきそのふしねな
げきてつくりてたるまだて日奴音にハ已然段のねを
やなぎのうつりせできも
そのましにいねまなといふ日流音にハ已然段を
そのやくにあれといふ又音雑詞にハかれとえあし
かれよかれなどのごとし　こハくあつまりてあれバ
音雑詞のそのみハソひが
たあれども変格流音にハれを仰とする　詞の八ちま
格あれバかれハ暫く音雑の詞の仰とし
た上巻にいふるくハ下二段の活にハよもじをそへ
し古事記下巻哥に加理許母能美陀礼婆美陀礼續紀
宣命にかくおもひてはゐることし止等のまたまふ万
葉集二にまつろをぬ國手治跡同五にたゞに卒ゆき

てあまぢ思良之米日十七に阿比見之米等曾日十八
におくつきそろく之米須氐人のそろへく日十九
に馬志まし停息佛足石歌に都止米毛呂毛呂し、そ
もろ〳〵大神宮儀式帳に國都罪云犯過人尓云祓清止
定給東遊風俗哥古本に与世波与勢与曾日不流比止能
尓久可良難久尓などもあり今の世にてハことたゞ
ハぬこてちまれと古への一格なり古今集のころまで
さかくハ此例をさく見あたらず又たて順集にゐこひ
まろ君ゞはしたゐまたそれの物になさきみちそふや
くまにゐとありよしまり一段の活詞中二段の活

ことばなハ此例古へにもなしといはれたり今按ふ
にこの格猶中昔にもをさ〳〵見ゆ宇治拾遺十三丁にそれ
してよせとふせとこそ枕草子六十七人々忘ハせなどお
ほせらる拾遺愚草思ひのほか大原はべらぬとしへぬる
まつこととのみなん神の来るしに古今集誹諧ふしのね
のならぬおもひにもえハもえ神だにけたぬむなし
けふりをまた木も切て見も駒に皆つけ石原や十市の
里に萩さきぬめりいさこともをふねをやよせむかの
みゆる嶋は蓮たをふまくをしなど猶あるべしさ
れハ古くより今にいたるまでの格といふべくなむ

べしの辞の事

べしの辞ハ玉襷の面のごとくべくべしべきべけれ
と活きてべくハ未然段の辞にて受る中にも続詞段
の辞にて受る中にもつゞくの格ある處べく
にて断れたることとく聞ゆるがあれども然らず是こそ
云残して下に意を含めたるの中にも上へ意のうつる
ものの二つにてべくにてきれたるにハあらず是よくこ
ゝろえおかざれハ紛らはしくおもはるゝことあるを
古今 ねハまてつ心をたにもあらさじつひにハいつであると知るべく
後撰 あきの夜もしけるかなしけるさもの人の見るべく

古今 山風にさくら吹まきみだれなむ花のまぎれに立とまるべく

續言段の下にをの辞の含みたる事

續言段よりハ必言につゞくこのやうに其段の辞のかゝるべきことあるを「てる月の流るゝ見れハ「さきちる見れバ「月わたる見ゆなと詞につゞく例あるもこハ續言段の下に必をの辞の含こて「流るゝ」を見れハ「さきちる」を見れハなどつゞくはたまりありてつゞく詞も定りなきにハあらで必見ゆといふ詞につきたるもいとあやしきことなりたゞし下を見ゆといふときハこの其ノ辞をこめたりとて

見れハいよ〳〵きこゆるそのなり

万葉 世の中をつねなきものといまぞしる奈良の都のうつろふ㋾見れバ

同 もかりふねおきこぎくらしいもがしま形見の浦にたづかける㋕見ゆ

同 天の海雲に浪たち月のふねぼしの林にこぎかくる㋕見ゆ

後撰 てる月のながるゝ㋾見れハ天の川いづるみなとハ海にぞありける

同 うゑしとき花見むとしもおもはぬにさきちる㋾見れバよハひ老にけり

古今 さよ中と夜はふけぬらしかりがねのきこゆる空に月わたる㋕見ゆ

セし志し差別事

セしといふべき所を志しといふべきところハやゝ

もそれバ誤ることおほく世の初学のともいもてな
やしくはになれるものうる詞の活をだによくさく
ろうろときハさらに紛ふべくもあらぬそのなりセし゜
といふべき方ハ下二段の活須音の續詞段にし゜の
辞をうけたると変格須音の未然段に同しくし゜の辞
をうけたるなり未然段にし゜の辞をうくることハ上にいへり下二段にてハ
合セし゜浅セじなどれごとし変格にてハなかねセし゜
こひセし゜などれごとしすさし゜といふべき方ハ四
段の活須音の續詞段にし゜の辞をうけたるなり
し゜かくしなどれごとしされハ四段に活く詞の

ときハし゜といひ下二段并変格のときはせしとい
ふとだにまじらうるときはさともなし然るをせに
くさ〳〵にさためうねていへるハみなひがことなり
さの格鈴屋集にある天の川をたなぬけきにのちや
うくせしとあやまられたる歌ありこハうくし゜といふべきところ
なり然れどもこれらハしふとともをつゞさされさるにも
あるべしそハ古事記傳十三巻卅三あしをあし゜とい
ふハ俗言なりといはれて同書十一巻卅三に持つ布ヒと
えるハあし゜かられたるなども然なりかの書なと
のごとくいと大きなるそのにハさだうものとやを
つしハあるべきことなり今此世のかいなての人の
文などにハいさしうでかりのきいてたるそのにも
詞の活をあやまりてにをハの格をたがへたるおい
とくおほき
そのなるをや

しかしがの差別の事

しかと清ていふとしがと濁りていふとハ其意いたく異なり思ひまがふべからず又清みてしかといふ方ハけきししかと活く辞のしかにてこその結ともある辞なりたとへバ思ひそめしかと云ハ俗言に思ヒソメタコトデアッタモノヲといふ意となる又しがと濁りていふ方ハ願の意にて仮令バ来てしがハ俗言にキテホシイといふ意になるなり。

古今　きのふこそさなへとりしかいつのまに稲葉そよぎて秋風のふく

同　思ふどち春の山べにうちむれてそこともいはぬたびねしてしが

後撰　いとかくてやみぬるよりはいなづまの光のまにも君を見てしが

ましまじ差別の事

初学の輩未然段のましを濁りてよむハ誤なりまじと濁りてよむ方ハ五種詞の断止段につきて表裏の差あり　ましまじともに音雑の格なり　詞にハうくることなき　ましまじの意ハ委しく助辞音義考にいへり

たとへバ行のましと清てよむハ自ら行キタイとおもふ意ゆくまじと濁りてよむハ行キソウモナイと人のうへをおしはかりていふ辞なり自ら然セ

じて思ふことハ未然段に志。ノ辞をうけて行かじし

いふべき格あり

万葉 真鉋持弓削河原之埋木之不可顕（アラハルマジキ）事等不有君

詞花 このよにハまたもあるまじ梅花ちもしなんことぞかなしき

万葉 ほのにこえとはきゝやすでおくやける君が心ハわすらゆましじを

源氏きりつぼ けるえたふまじうおもいたまふ云云

さむせむ差別の事

山口栞上巻に云つよもざんと、いふべきをかよちや。

んあむざんといふべきをあむぜんと誤るたぐひ多

し又此裏にてあむぜんといふべきをあむさんおこ

ぜんといふべきをおこざんおむぜんといふべきを

おむざんとあやまるたぐひも少からず是これらハ皆

べて佐行四段の活と下二段の活と又変格とのけぢ

めたるよくたとまへハはちる誤みなまぬかれぬべし」

といへるハこれのこなら又何れの詞もその活用だ

るよくともえたらむにハまどハしきふしハあつる

あらぬそのあり

續詞段にに、辞二ッ有る差別の事

續詞段に係る辞の中に變格奴音屬辞にやゝ静辞

のに二つあり屬辭の方ハ過去ノ意の辭にてにけむ　けり　に
きにしなどけむきしかとけらしけむけるけれたらた
りたるたれと三種の活辭の必つゞくところなるべし
又靜辭の方ハのなくそてもたゞるにて駒なべていさ
見よりも春日野の若菜つみやなど靜辭をもて合
せるの上の詞にのしかくるそれ二つにて動辭につ
ゞくことなしこの差別あることをよくさとりえお
くべし

なむノ辭二つある差別の事

なむといふ辭二種あり一種ハ五種の詞の未然段を
うけて願となる一種ハ續詞段よりかゝりて行末を
おしはかる意となるにて未然段の方ハ靜辭にても
にをはの結とのミなりての。が。ぞ。や。か。れ結になら
じ續詞段の方ハなむにぬめるぬれねと活く辭のなむ
未然段のなむノ係りたるにてなむともなめとも活く
なりけむきしかりのけるむノ係りてけむともけめと
なりも活くみことなることなしこをよくおもふべし
故もにをはハ並のがぞやかれ結ともなも又言にも
つゞく例あり　なむノむハ断れて止りもし言にも續
く格なればなり玉襷圖に合せてこゝ
ろうべし　未然段のなむもにをはノ結になれるハ
古今　こひ〳〵て稀にこよひぞ逢坂のゆふつけ鳥ハなかずもあらなむ

同　飛鳥の声もきこえぬ奥山のふかき心を人はしらなむ

同　こゑはして涙は見えぬ時鳥わが衣手のひつをからなむ

続詞段のなむ也にぞをば結になれるハ

古今　かたちこそ深山がくれの朽木なれこゝろは花になさばなりなむ

同　人しれず思へばくるし紅の末つむ花の色にいでなむ

同のぞりぞりやりの結になれるハ

古今　春ごとに流るゝ川を花と見てをられぬ水に袖やぬれなむ

同言につゞけるハ

古今　わがやどの花見がてらにくる人はちりなむ後ぞこひしかるべき

後撰　もろくれいちはたつの人つま逢ひてやらなむおやはあらぬ

又一首の中に二種のなむをつかひたるハ

新古　やかずとも草はもえなむ春日野をたゞ春の日にまかせたらなむ

又一種言にそへて添なむありこれぞの意にて結もぞ

の結になることなし則古今集序に人丸なむ

歌のひじりなりけるなどの類なり文にはいと多

し歌には稀なり

古今　たもとより離れて玉をつゝまめやこれなむそれとうつせ見むかし

六帖　つれ〳〵にながむる涙のながらふ世人なむこれを思ふともなし

断止段にやの辞二ッある差別の事

断止段にや。の辞二つあり玉襷にや□かくまうしたる
とや（欠）うくまうしたると二種ありや□この方ハ語のと
ぢめにおきて切るゝやにて續言段に□のくまうし
たると入うハる格なりそハ卅段にてハあもやなし‖
やなどいふべき格なるを續言段にてハかゝりへて
あり。のなき‖。なといふ格あり断止段にやをのくは
ことハ誰もおのづう
ふにあやまることなきそのなりを續言段にかりをの
くべきをあやまりてや。をかくること近世人の文な
どにハをりく見ゆらいろせざれハあやしけてやこの
まることありよくくときすへおくべし
方ハ歎のや。にてさとりやをすなしや。あさましや。
なじみことし此外やにハ種ゝ此格ありくハしくハ

おのが著せる三集類辞によりて知るべし この書にハ例
格のかぎりを漏さじ集へて類をもてわかちされバ
いつれの辞もいとつまびらかに知らるゝことなり
古今 妻こふる鹿ぞなくなるをみなへしおのがすむ野の花としらじや□
後撰 うつろはぬときはみやまへの時雨木のもとくれのこゝろハきこゆや□
いやもの おもひいつや□これをやまのひとつ松ちきりしことハいつもわすれバ
歎辞のや
拾遺 をしむともかたしや□わかれ心なる涙をたにもえやハとゞむる

續言段にぞ辞二つある差別の事
續言段にぞ。の辞二つあり玉襷に既かくまうしたる

とぞ」のくゝりしたると二種あり此ぞこの方ハ常のぞ゜
にて係なく辞なり　のが゜ぞ゜や゜か゜ノ結ともなるぞなりぞ」この方ハ語
のとぢめに添て切るゝぞ゜にて添るゝもかへてぞこゝ
になまよふぞなど此ごとしこハや゜かなも切るゝと係、
なあるし二つあり ごとくぞも猶これに同し格なり

古今　いで我を人なとがめそ大ふねのゆたのたゆたに物おもふころぞ」

同　名にめでゝをれる斗りぞ」をみなへし我おちにきと人にかたるな

後撰　をみなへし草村ごとにむれたつハたれまつむしのこゑにまよふぞ」

連辞の事

連辞ハの゜が゜つ゜や゜の四ツなり何れも言と言との間にお
きて上下の言を連ねつゞくる辞なり其意おなじく係
りもなくさげるなりさての゜ハ世の゜中梅の゜花なと此類
が゜ハ己が゜身梅が香なと此類つ゜ハ天つ゜風沖つ゜浪など
の類や゜ハをのがや゜やぶしたなや゜をしほうつらぎや゜
たのまなど此類にて地名の中間（ナカバ）すゝ枕詞の中間な
る神風や゜伊勢さへづるや゜からうたうぞの類ありなどめこれを
のやなどいふ付て此四つ此辞すべての゜み通へとも
唱ハ同らし
さまうにいをバいさゝかの差別なきにしもあらず
そハ助辞音義考にいへるを見て知るべし

強辞の事

強辞ハぞやの三つあり何れもこの辞を除きても
其意聞ゆれバあるもなきもことなることなきが如
くなれどもこの辞にて其意をつよめて詞もとゝの
ふものなれバこの格おほかるに思ひ過したきこ
となりけてぞハ松とし聞ゆるぞ君とぞいへバなどれ
類をハとは我あふみ流をもやし又見つをゆりせ
見てをあかさせたむけてをゆけなどれ類もじめれ
ふみなどれをとこれなうゝぞゆかむなどれぞとハ
異なるがごときそのうふもぞつよめの辞の意の
一種なりやハなほまづさくやこの花ほとしきに
と知ルへし
なくやさ月まつくよさにやをうべきかしなくや。

霜枕などの類ありぞをやためぞやをくつろけたる
や。などいふ唱へハかなひがとし
けてぞの下ハ必ずと受けべき格ありと受けざるもだ
いさゝの雑りたれども三代集にいたりてハ必ず受
る格にてその格にたがひたるハ一首だにあること
なし但しぞの下にまにもがなどの辞のつきて何
じかも人めつゝみのこゝもずやとをしもそぎてゐる
云ふどいふときハぞと受ざる格ありむあふれにこ
のやしめ詞のぞもしおきざまあしきハいときゝぐ
ろしきものなりありうき世の歌に道しあるせなとよ
むなしあれバといてざれバとゝのても返といでれた
るもなしあれバといへバ下にだ文字ありてとしの
へるをなしあるせなてハかの格にやさをの下ハ必
たがひこれハとくのもさるなり
みと受べき格なりス一種のぞの下ハえつぞゆか
必ず未然段の辞のむかふ又仰詞のつく格なりや

〆の下ハ必言のつゞく格あり

強辞のしの下をぞノ辞にて受るに二ツの格あり

事

上にいへる強辞の下をぞと受るに二つの格ありそれ

ハ未然段のぞにて受ると 松としきかバ立とし たゞハなどの類なり已然

段のぞにて受ると共二ツあり 春としるれバ君とし

いへハなどの類なり

けて未然段のぞにて受たるハ志ノ辞にたゞ意あり已

然段のぞにてうけたるハ其事其物を慥に云定むる

趣あり次に引る證歌を考へて知るべし

古今 ぞ風と谷の氷としあらマセバ深山かくれの花を見ましや

同 ちる花のなくはぞとまるものぞハ我鶯におとらましやハ

已然段のぞにて兼たるハ

古今 をみなへしうしと見つゝぞ行をとこ山にしたてりと思へハ

同 志たなれてきにし心の身なしあれバかへるさ毎ニハ恋しかれぞ

つめるノ辞の下にある格の辞を含メたる格

の〇が〇ぞ〇や〇の〇係なくてつるゑめるとゞめたるを

詞玉緒にハ変格としてあげられたるけにつれの格

にハ変あるもれからされてつるめるの辞の意をよく

弁へてその歌の一首の意に合せ考ふるときぞつる
めるにてとぢめたるにはあらでその下に必なるの
辞の含みたること明なり　つる　める　の意はおのれ五十音の義によりてその本
つ意を極めたる考ありそは助辞
音義考に弁へたるを見て知るべしそは此格の古き歌
を見よいづれも上よりいひつゞけたる詞におのづ
から歎の意の含まりて必なるとゞめざれば適は
ざる語勢ありてつる　める　ノ辞のうへにて其意含
めぬを文字のうへにのきてあればつる　める　にて暫
くとぢめたる如くにて實はその下に含めたるなるの
辞にてとぢめたるなるを次に引ける證歌をもてしるし

味ひ考へて弁ふべしされば「も」にを「は」「は」ノ係をはつ
加め　の下のなる　の辞にて結びたるなり　然るを世
ての歌人のうへる心ちふひハなくての　が　ぞ　や　が　なる
係なきをみたるにつる　める　てとぢめたる歌みれを
もく見えたるはかの詞の玉緒に変格とてあげられ
たるをふかくも考へでそのなるなど等されバ上に
いへる格にはこゝもつなでみだりにいひてたるな
ていとくあやまれるなおほなるぞうし此格ハ必上
よりそひおろに詞におのづから歎を含こてきこえ
さてつる　める　此下にたしなになると含こてさゆる
なあとてハ適ひがたきそのをや心を用ゐてみるそ
るハそのはべ
うらぬ格ぞ

後撰　うら雪の又のまろ衣おきつ春来るけりともおもそろなれめる　カナ

同　数ならぬ身をおもひ荷すてよしれ山ちきあけきを思ひこそめる　カナ

拾遺 谷の戸をとぢやはてつる鶯のまつにおとせで春もくれぬるか カナ

同 のしまなるつくま江神のつくしと思ふ身ひとつにこひをつむか カナ

伊勢物語その よあけなばきつにはめなでくだかけのまだきに鳴てせなをやりつるか カナ

じぬより音雑の詞のつゞく格

じぬ如 よみは言につゞくかやうに續言歟の辞のかくはべき格なるを直チに音雑の詞につゞきて同こそとめぬかなるくるしいをもぬかなれば、などいつる格あり。さいつねの格にはいたく異なるおなときこその。のに音雑詞は形状をいふ詞にて外四種の詞にはもとより異なりてい

たゞ様言に近きものなれば自然この一格はあるなり

後撰 夜むしのきらしやるふ思ひをばいはでやぬか。かなしと誰か見ざらむ

同 思ふてふことこそうけれ呉竹のよたらん人のいをぬかなれば

同 世の中に猶有明の月なくてやみにまよふをとはぬつらしな

同 見えもやぬかふかき心のたえてはへ人にちぬとおもふ物かは

拾遺 春日野の萩のやけ原あさるとも見えぬかなき名をおほくあるかな

やまく

拾遺 岩をしみようのちぎりもたえぬべしあくるかひぎりくるかきのかな

これらも猶この類なり

せでたでゝ辞の事

言につくせりたでゝ辞ハ玉襷にも言ける辞のとも
にあげられたれどもこハつねの言につゞく辞とハ
別にて必居言のにつゞく格とこゝろうべしそハ
せりハ為而有（シテアリ）のつゞまりたりハ而有のつゞまりなる
れハ唯の言にハつゞかざること明なり山してあり
山てあり河てありなど　河してあり
ハいふべくもあらぬまであるべし但し夫木集にて
もろきハ神の心にうけて竹でひられ言ねもゆふり
つふせでとあるをもとりつふをまるといふことなれ
あるにこてにてハしてある意にいへるにて　たゞ月

せり花せでなどいふとハことなり古今集廿にまがね
ふくきびの中山おびにせるほそ谷川のおとのさや
けさとあるもおびにせるといふことをしてある
意にいへるにて上に同じ此例猶これかれ見ゆ
古今十七　おもふどちまとゐせるよハからにしきたゝまくをしき（ものにぞありける）
同六　ゆきふれバ冬ごもりせる草も木も春にしられぬ花ぞ咲ける

けらしあらしからし辞の事

けらしあらしからしゝ三つの辞ハ玉襷にあげざる
ハもとけるらしの約たるにて別にひとつの辞にあら

されバなりさてけらしハけらけりけるけれと活く
辞のけるにらしの附てそのるが約りてけら
じとなりたるなりされバ必續詞段にかゝる格なり
又ならしハならなりなるなれと活く辞のなるにら
じの係りて同しく約りてならしとなりたるなりさ
れバ必續言段に係る格なり　けるなるハ續言段なる
ことハ上の有の詞の所に　に断止段のらしかゝる
くハしくいへり合せ見よ　又ならしハ音雜詞ノ久活の
續詞段より有といふ詞につきてそれにらしの係
りたるにてくあらしつゞまりてかとなりるらハ上の如
くつゞまりてからしとなりたるなりさむからしハ

さむくあるらしよりてからしハよりてくあるらしなり
さて何れも結ハらしに異なることなし

古今　さくら花さきにけらしなあし引の山のかひより見ゆる白雲

同　おちたぎちたきのみなかみとしつもり老にけらしなくろき筋なし

同十一　恋しねとするわざならしうばたまのよるハすがらに夢に見えつゝ

同五　霧のたて露のぬきこそよわからし山のにしきをおれバかつちる

言を有きての辞をうけたる格

のノ辞ハすべて言にのこす体辞にて詞にかし体
ことハたえてあらぬ例なるに古今集十四に君やこ

む我やゆかむのいさよひに槙の板戸もさゝずねにけ
り後撰集十四に夕されば思ひぞしげき待人のこむ
やこじやの定めなければなどあるこの類のやを詞
玉緒に用言より受たるのといはれたる然れども
ハ辞ハ言にのみかゝりて詞にかゝはることも辞の下
に合なることもあらぬことハその理あることにて
そハの本つ意を音義にすゑておし極むるときは
明なりの本つ意ハ助辞音義考にくハしく弁へおけり合せ見よ小畠守部の説
にこれらの乃ハそと乃の上にある言を省きて其言
にうつしたるのにて古今なるハ君やこむ我やゆか

むと互のいさよひにといふにて互といふ言を省き
後撰なるハこむやこじや心の卯の定めなければと
いふにて心の占といふ言を省きたるなりといへり
けなさることなるへしてそれじの切末やぞといへ
るもてそれじといふ契の切末やぞといふ意なるべ
しねてのあさけの云々またじいまハのあふましなバ
のなども猶さの類なり義門ノ説にもぞなぞノ三ノ辞ハ云
居て言の格となる例なりさ
れハの辞のうしてゆうむのいさよひ老ぞ死ぞの
くなりてそれじの切まなどつゞく例ありといへて
この説も
学ゆべし

〇ば辞二ッ重なる時一つハ續詞段に云例

ぞ、辞の重りたるときは一つハ續詞段にいひくへて猶
ぞの意を含む例あれ後撰集一に松もひきてなほも
つきじなとめる哉いつしかさくらをやもさなほむ
とあるこれ則松もひかじやなほもつきじとふ意
なるを一つハひきと續詞段にいひくへたるなりこの
格物語文にハをりをり見ゆ漢籍訓にも此格あれそハ
不飲酒食肉(ヲ)など訓あるも酒を呑ず肉を食ずの意な
り都て漢籍訓といへども古の博士の訓おけるハ彼(カ)
方(ナタ)の意にも適ひ此方の語格にも違はざるやうに訓
るを後の儒(ス)者(サ)ども此捩(サカシラ)に訓し改めたるにはいみし

きひがことのみ多きぞうし然れども古点といふの
ぎてハ古のよき博士の訓めるまゝなるが殘りて語
格の学の心えになるべきことどもおほかりなるを一つ
二ついはゞ詩經の蔽芾(ナレ)甘棠勿翦(ナキリソ)勿伐(ナキリソ)召伯所茇(ヤドレリシ) 清家古写
本にかく訓めりと訳文 これハいとよく適ひたる訓な
童喩下巻に引けせ
りそハまつ勿翦勿をなきてそと訓めるも正しく召伯の
所茇をやどれりしところと訓めるもことに古法の
に雅しき訓なりやどれりしハやどりてありしとい
ふ詞の活にて召伯のむかしやどりてありし所をさ
したるが情によく適へりさてやる 古文帰去来の文に

帰去来田園将荒(カヘラナムイサ)(レナント) 今ハカヘンナンと訓る本もい
訛れりいといやし
と正しき訓にて古の訓の残れたるなり然るの二つ
のなむ願ふ意のなむと行末をおしはかる意のなむ
とを訓しつけたるハいとも正しくめでたしとたて
へつ随くなむそハ初のなせハ帰去来(カヘラナンイサ)のなむ四段活の帰ら
むうへアヘりへるりつれと活く詞の未然段のうへふと
いふ段になんの辞をうけたるにて則願のなむなり
次ノなむハ将荒(スサ下)のなむ下二段の活のあれあるあるてある
れと活く詞の続詞段のあれといふになむの辞をこの
けたるにて則行末をおしはかる意のなむなり凡て未然

段にかゝるなむハ願の意続詞段にうくるなむハ行
末をおしはかる意なることハ上にいへるがごとし
この外猶いと多し近世行ハるゝ点本ハつゞまやかなるをむねとして中々に意を失
へるがおほし訓点のことハおのが学則の中他國の学にも
必語格をまなびてハひがこと多しといへる条にいへ
りやゝ近世行ハるゝ訓点復古なといふものにいへ
る誤見て志るべし今の世に行ハるゝ漢籍の点本にてハ道春点に古点多く残れり康
熈字典の附録に都賀枝春がいへる言に道春点と称
するハ昔より行ハれて人珍しうならず思へども経学
の凡下に行ハるゝ初めにいでゝ和訓てにをハ共に皆
左傳のよしにて民家にハ下ふさはぬものと兼るこの
訓点疏略に見ゆる「りくの」とい
へるハまことにさることとなり

歎辞のなもやノ事

なもやの三つなとともに歎息の辞にて何れも相通ひ
て断止段にかゝる格なりなハうつてにけてなおも
もじなるなしなどなりなりハさひしものなし
ものどれものなりやハ上にいへるおごとしそのなし やっノ三ツの
差別その本つ意をいへバいさゝ
うつゝ異なりそハ別にいへり
古今一 花のいろハうつりにけりないたづらに我身よにふるながめせしまに
後拾 ちきりきなかたみに袖をしほりつゝ末の松山浪こさじとハ
古今五 あしべより雲ゐをさして行雁のいや遠ざかる我身かなしも
拾遺十三 おやせ子があてうしもあらでねたる夜ハ暁がたこれむなさびしも

同よノ辞の事

歎辞のよハ続言段にうけて辞にてうれしきよのなる
しきよちきりてしよちきりてきりといふときかハちなどころ きりて知るといふ格なり
例あり然れに未然段の辞ならぬねと活く辞にのこれ
続言段のぬにハうけずして断止段のなにかゝりて思
ふよりこれよなどいふ格なり 但しおノ辞に合
にかゝるとあるべしこれハ時ハなよ共
これなともいふべし おごとし さはことによ
くあてなえおおされハ迷ふことあるも

冠辞ハ断止段にて云例ある事

四種二種の詞凡て續言段よりも言ひつゞくべき格な
る故冠辞ハ續詞段又断止段も下の語をおこし例ありそハ
百たらぬ五十などハいはで百たらず五十といひあ
られふる。遠江とハいはであられふる遠江といひい
さなとる海とハいはでいさなとる海といふ類なり
余ハ準へて知るべしさへづるや唐おしてるや難波
などやうてきて下の語を發すも同意なりうちひ
ちはやぶる神など續言段よりつゞ　さす宮
きたるハなべてのことなり

對へていひおくる格の事

○

對へていひおくる語ハ續詞段にておくりて重ねて結
にいたりて断止段にていひをさむる例なりたとへ
ハ古今集の序に天地をうごかし目に見えぬおにが
みをもあはれとおもはせ男女の中をもやはらげた
けきもの、ふの心をもなぐさむるハ歌なり。又歌
にても「きのふといひけふとくらして云々などのごと
し此外いと例多きことなり

○

續言段を重ぬるときハ續詞段となる事

續言段の詞を見るくきくしなどかさねいふときハ
必詞につゞく格となる次に引る證歌によりて考ふ

べし
万葉十二 おくれゐてこひつゝあらずハたこの浦の海人ならましを玉藻かる〳〵
拾遺十七 よの中にふるぞはかなき〔〕白雪みうつハきえぬるそのとも〳〵
後拾十六 かしも木ともその下くさくれごとに〔〕なれかめてや〔〕もるぞら〳〵

や何とぞだもの格

やの係をとるくりつこしたれなど疑詞にてとぢむる
格あまくハしくハ三集類辞につど〳〵たるを見べし
玉葉十六 むたれのるやめやいつふ〔〕こよるきれそれ浪をけ沖にでるけふ
日一 もる霧たてるやいつこ〔〕みよしのゝよしのゝ山に雪ふるなれ
日六 ぬしやたれ〔〕と〔〕と向むいもなくにさふバなべきやあハれとおもふむ
やよ〔〕ともふ牛りの露や何なる〔〕とおもそていふそのや
何なりなどの類も暫く此格とせらるべし

なそれ辞の事

加とあげてそと結ぶハ禁辞にて必ずそととぢむる
には上に加と有べき格なり然るに近世の歌にそと
あまして加を略きたるがあるハいみじきひがこと
となり加に句の意あればこれを略きてハ其詮なし
たゞしぞを省きたる例ハあまた万葉四我もおもふ人

もな゚しあれ「おほなはに浦ふく風のやむ時なかれ」と
あるがことし六帖にしがせこがふしさけ兄つくな
けくらむこよひの月夜霞たなひきぞ゚これハが゚を略
きて下にぞ゚とめしいつるひがことなり下のぞ゚ハ略
くとも上のが゚をバ省くべからぬ格になん（こハ詞の玉緒にい）
はれたるおもむきなれどもくハしくハ彼書によりてしる
るべし夫木集に牛犹子にふまるゝが゚座のこのたつふり
角あれバとて身をバすれみぞ゚持てまする此のな゚し゚此辞
これらも同しあやまりなり
ハ玉襷にてハ續詞段の辞にておもひな゚しひし゚みた
りな゚もてし゚などいへるハまどハしきこともなかれ
ど人な゚しまれし゚花なちふじし゚なとソへるハ人やう

花などみ言の下をな゚にて受けたるごとく風とハき
こゆれどもな゚ハ必詞の下を受くる辞にて人なしまて
れそハしまれな゚し゚の意にてな゚し゚ともにしまれとい
ふ詞の下につゞきたるをしまれといふ詞の上下に
な゚し゚をしけておきたることき意としきまへおくべ
し上にいへるおもひな゚しひし゚などもな゚ハ實ハおも
ひといふ詞の下を受けたるにハあらで移してとい
ふ詞よりつゞきたる辞なり

變格奴音の屬辞を仰とせる事

四種二種の活ともすべて五段なるを變格奴音并そ

の屬辭のこハなにぬぬるぬれね と六段に活くがごときも
のうちぬれねの二つもともに已然段にてぬれノ方ハ
ぞなむやノ辭をうくるときハ已然段となりまたこそ
のむすびともなるねの方ハ仰のみなりてこその
結にもならず、人こそあらねなどいへバぞノ辭のね なることゝいふまでもなし
ならばとやの辭もうけぬ例とするべし 後撰にひ
くらしつるこゝろをこひしみけぬべくハみやまにとて
にぞやもきねかしとあるもきハ変格久音の續詞段
にてその段の変格奴音屬辭のねを仰に用ゐて則仰
辭のうしをうけたるなりこれにて知るべし

續言段にぞやノ辭をうくる事

断止段にはぞやノ辭をうくることハつねの格なが
ら拾遺に春の此ころもともといふなるハふた
りぬぞやてみてたりや君などをもじめいと多し
續言段にかけたるハいと稀にて後撰に春くれバ咲
くてふことをぬれ衣にきせるぞや其の花にぞ有り
けるとやし新千載にぞむきけむおやのいさめのあ
しきハたらしみちをみせぞやこの二首の
外又あれらずければ断止段にうくるを正しとすべ
し

願の意のこそノ事

○願の意のこそハ必續詞段にかしやてこそにて断れて下へハつゞかざれバ別に此こそを結べる詞ハあらぬ格なり

万葉五 うぐひすのまちがてにせし梅が花ちらずありこそ思ふ子が為

同六 あめにます月よみをとこまひハせむこよひのながさいほよつぎこそ

同 かくしつゝあそびのみこそ草木すら春ハおひつゝあきハちりゆく

同十 おもふ子が衣すらむにほひこそ島の榛原秋たゝずとも

断れたる如く聞えてきれたるにハあらぬこその事

古今恋四 つのくになにハおもはず山城のとはにあひみむことをのみこそ」万葉十一 セドウ歌 いきれをに我ハおもへど人めおほみこそふく風にあらバしばしばあふべきものを」などいへるこそハふと聞きてハ切るゝ格のごときものなれど此こそにて切れたるにハあらず其ハ古今なるハあひみむことをのみこそ思へ万葉なるハ人めおほみこそアハネと含ミたるあり此格猶あまたあり考へおくべし

こそノ係を残ノ辞にて結ぶ事 并こそノ結ヒなき事

并こそノ係をもの残ノ意のまゝにて結べる例ありその

れども三代集には一首もあることなくそれより後
もいと稀なり例なり然れば正しくはあらぬ例とさ
ころえて古へに心あらむ輩はさるまじきことぞか
し
千載十一 よそ人にとられぬるこの君にこそ見せもやと思ふまでの花を。
続古今 志たにこそ人の心もうつろふをいろに見せたる山さくらかな
やまこそのをとりつるもあり
新勅 志たにこそかよひしものをいつにしてにほひきそのうき名たつらむ
日十七 たえびこそつらへしものをいつまによにあらはるゝむふむ関の藤川
あるにと結べるもあれこれもみその意に近し

金葉十 いつしかと月をのこそなかめしに今は日をまつ我身なりけり
躬恒集 明ぬればつれなくなりぬをみなへし人志れぬこそをらんと思ふよ
これらはことに正しからぬ例なり
後拾十九 信濃なるその原にこそあらねども我はゝきゞと今はなりまし
新十六 和歌の浦に家の風こそなけれども波ふく色は月にみえけり
玉十二 ちぎりをこし君こそともじなしぬれどやどにはたえぬまつむしのこゑ
これらは已然段のねにぬれにて受なぞらへその段
のとゝ辞をもて下につゞけきれば正しからず必らずし
まぬがまじきことなり　詞の玉緒にはこの外にとも
と受る格とて後十八七きい
れたる名こそ流れてとまるともたえ見るべき淑
のいとうも千十三そこそ麻覚の麻に見えず切

もあまりしことのうてあらやせじなど引れ
たれどもこれらハいみじき誤なりをや

未然段にかゝるぱバノ辞清濁ノ事

見ずばバ聞ずばバなどいふばハ未然段のずぬねと活く辞
のずに同段のだノ辞のかゝりたるにてさともなき
を古言清濁考にぱバんもとぱバときみてよむべき
を濁りていふハ漢籍訓よりを音便にそへたるなら
ずバと鼻音のよりに引れてばを濁るよりおこること
なりとやて鈴屋の大人もぱバときみて訓れたれ
どもこハ必ならずされハ適もざはよしあれそハ助

辞音義にくはしくいへり そハ玉襷の略標をつくるこゝろえのためにいひおけるのみ

がての辞の事

がてノ辞ハ續詞段にかゝる静辞にて「こがや」と殊し
もそぎがでになく「君にこひつゝいねがでにする」な
どいへるハさともなき哉万葉集巻二に有勝麻之母（アリガテマしも）
同巻に知勝奴鴨なほ巻々にいと多し など未然段の辞のう
れる例あれどこハ静辞に未然段の辞のかゝることゝい
うべなるがおほときもれなかなか然なれそハさのがで

の辞ハもと下二段奴音にかねかぬかぬるかぬれと
活く詞にてのねのねを韻にて知へてかてと云居て
静辞になれるなり かねのかでと轉るときに加ノ音濁音にかなるハ上の詞よりて引きつ
つけがなり 去ぬるに「あへがてましも」「志へがてぬるもな
どいへる方ハ云居て静辞となれる方にハあへでそ
の本の下二段の活詞のましなるにて「かねましかね
ぬなどいふに同しく「かてましかてぬなど未然段の
辞のかゝれるなを云居て静辞となれる方とハ別な
り思ひ混ふへからず

べらなりとつゞく辞ノ事

べらノ辞ハ断止段にかしはる静辞なるに續言段にか
かノゝる屬辞のなりの係りてべらなりといへる例お
ほしこハべらハもと音雜ノ活の屬にてべくべしべ
きべけれと活く辞をべらと云轉したるにてきこゆる
ときハ居言の格となりて續言段の辞のかゝれる格
となるそハ音雜ノ活にてちやくをやしちやきちや
けれと活く詞をちやみと云居て凡早ミなりなと續
言段の辞のかゝりたると全ク同し格となるへ
し

しもあれとつゞく詞の事

折しもあれ時しもあれなどのしもハ強辞のしにて歎辞のもを合せたるにていとせちなるよき意となりてこその意にいと近くなるなりされバ結もこその結なるにて結ぶ格なりとこゝろえおくべし
されどこハこそのごとく句をへだてゝもと結べる例ハあまりぬこともなり

後拾 をみなへしおほかる野べにふしもあれうしろめたくもおもほゆるかな
古今 ときしもあれ秋やハ人のわかるべきあるを見るだにこひしき物を
新勅 けふしもあれ雪のふれゝバ草も木も春てふなへに花ぞ咲ける

延詞の事

延詞におほよそ三種ありそハゆくをゆかくきくをきかくなど下にくの音のつくとゆくをゆかばとハ音の上下に活きてゆかなど下にばの音のつくと（そのかしゆかせともある）ねくをねかふうつるをうつろふなどこもぶの音の上下に活くこと上の例になし下にぶの音のつくと凡この三つなり此三種ともすべて字の韻より阿の韻にゆきてはてくるもふの三音にゆくなるそハ下にぐの音のつけるにてハきくをきかくなしをなさくまつをまたくいふをいはくふむをふまくのるをのらくなど此類なり下にまの音の

つけるにてはきくをきかひなんをなさひまつをまよ
たそいふをいなんふむをふまひのるをのらひなど
の類あり下にふ゛音のつけるにてはねくをねらふ
なむをなまふやひをやまふちるをちらふやるをや
らふなど此類ありけていづれの延詞も寔韻より必
阿韻にゆきてくゎ。そ。ふの三ッ音にゆくことはおのづか
ら然あるべき奇しく妙なる理あることなりそはく
はしくは活用本義考にいへるやう言霊妙用延詞図
にも合セてさとるべし

二重約の事

二重に約めたる詞その例いとおほしそはこひしけ
むとも命をしけむことの志けりむなどの類ありこ
れは音雑詞の續詞段より変格詞ノ未然段ノあらといふ
詞のつきてその段のもぱノ辞にて受たることだにて
たとへばをしくあらむとつきたる詞のくあのか
と約めそのがとあらノらと再約りてかとなるその
がを一音進めてけむとなれるなりこは別に二重約図
一枚あれば合セ見べし
古体の歌に志つにていひさして餘情を含む格
古事記神武天皇の大御歌にあし原のしけこきをや

にそなかみいやさやしきて　そなふたてねしつかな
こを記傳にはそなれが心をおこして結び給ふとあり
上にひとついへる言を再いふときの辞に含め
て聞ゆる格ある事

栄花物語月宴に古今集廿巻えらせとゝのへさせ給ひ
て世にめでたくやさせ給ふ今まで廿餘年あり古への
今の古き新きおえらせとゝのへさせ給ひて世にめで
たくやさせ給ふ

好忠集 人つまとてふたつのとふたつ思ふにはなれこし彼はいかれきされも
千載十一 太宰大弐重家人にきこえはれてよのつねのとや君おもふらむ

古今ニ衣手のひつをタテありとあくもこれニ同し例之

伊勢集 梅の木の傍ある竹にたちむかふぬくといふ題にて
竹のもにちよをかくらむ梅花ぬる中のをとるとみゆるく
仏足石 くすりしはつねのもあれどまらひとの今の薬しもめでたかりけり

最希にハ常の格に異ある居言ある事

居言ハ前（サキ）にいへるごとく四種ノ詞ともに續詞段を云
さるて言とびる格なれどもいとゝ希にも断止段
を云居たる言もあり其ハ常の格にてハほたり
といふべきをほたると いひ 潤ハうるひといふべき
をうるふといひ 蓬生などハよもぎうといふべきを

よもぎふといふ類なり　人の名の源ノ順渡邉競などハ
て断止段をもて名としたる
も同し
格なり

已然段にかゝる辞の係る例ある事

玉襷の図にてハ已然段に係る辞ハど・ども・や・ハ三ツのみ
なれバ古今集十三ノ山科の音羽の山のおとにだに
人のしるべく我こひめかも」とあるこそハ一本にや
ともある方正しからむと思ハるゝに古今集序に
いにしへをもふきて今をこひざらめこそとあれ
いつれの本もこそにてやもとある本ハ見あたらず
いといふかしくてあるがによくおもへバ古事

記ノ中巻にそれつゞみうたにたてゝ宇多比都々迦美
祁礼加母麻比都々迦美祁礼加母とあれバ已然段に
かの辞のかゝる例あることもしろえおくべきこ
となり

こそぬるもとつゞく辞の事

万葉二にあをこそぬるも同五につぎきなこそぬるもな
どあをこのこそといふこハこそのそを省きたるに
て万葉四にいめに見えこそ同五に梅花ちらさあそ
こそ同六に五百夜つぎこそ同十に我につげこそな
ど限りなくおほくありて願の意のこそなり　このこそのこ

催馬楽ニ伊夫安加已禾。波
也久由支已世万川知世禾。
安波礼。万川知世禾。波礼。
米川知也万川良先比止
乎。由支天波世安波礼
由支天波世見先とあ
これも本文ニいつると同じく
これぞの省き為を
合せて願ノ意ニみるあり
ニハ万十二ニ乞吾駒早去欲
赤打山将待妹乎去而速見
年ともあるニて小ハ万葉ニ
ハ欲とあるそもてもしめの
これの意をよくこころうべし

とさきニ　はてこその願の意ハ事ごノ音の方ニ具へた
いへり　ごノ音ニ願の意を具へたること　ぞノ音ハ省きて
れバ　助辞音義考ニよくハしくいへり
も同意なりけれハぞを省きごをいひまして夬哉再
変格須音なる為の詞して活用したるなる為の詞ニ居言を活
用あるときニたとへバもこちもしづと上二段ニ活く
そへいふ〻詞をもこちと云居てもこちしもこちじなど為ノ詞
ニて再活用したるがごとしあそびおそおくれおそ などいとくおなし　然ニ
をせよこのあせのせをぞノ音の轉りたるなりなど
いへるハいとも麁漏きことなりあるそのぞの轉りかく
ひニハこそぬらもとこそニぬノ辞のつゞく（つゞく例なくていと適ひがたしいふて然）べきことあ

ふめやもやゝ万葉八ニちてこそなゆめ同十五ニこひ
まろ道ニあひこそなゆめなどあるも此ハ為ニて上
ニ同し鈴屋大人云こそハ願なるそこそなとこハ別
いへバやりこ勿しとねがふ意ニなるなり
ニ図ニあやハしたるも此一枚あり合セ見べし

見がほしとつゞく詞の事

万葉三ニ見がほし山仁徳紀みがほしそのやしま万葉
十一ニ見がほし君など見えたるを世ニ見まくほし
きと同し詞といへるハ例のいと麁漏ことなり見ま
くほしきハ一段の活の未然段よりその段のまくの
辞のつゞきてそのまくハ續詞段の格ニて定まるのご

とくなしきといふ音雜詞のつゞきたるにて詞のよまなりぬるを見ざほしといふ方ハ見をいひもちて言の辭なるがを係ばなしといふ音雜詞をも共にいひちゑて見ざなし物見ざなし山なと一つの言にいへるなりこの差別をさとりえおくべし

得の活用の事

得とゑ詞の活用ハえうるうれと活きて下二段の活ばまにて既く詞ハ獨に阿行下二段の活としてあげられたり然れとも阿行ハ他行ばハいたく異なるゆゑありて言にも詞にもなることなくやゝ詞の中下につくことなくもし他詞の阿行の音の上につくときハ自然省れもしていともく奇しく妙なる理を具へたる行にて詞の活用もこの行に活くべきこと絶てあらぬことなり然るを世人さる所にハ心づかで唯ハちやうにすて得ハ阿行の活とのミ心得たるが多き中に稀くに物よく見知れる輩ハあくハあふじらとかでハ心づきながらいうにとも定かねてけて黙兵る輩もあゆめり然るにに言幸含翁ハちやくこをおもそれて由宇ノ二音夜行和行なり雑り活きたるにて之ハ由音のえハ宇音のうなりけれバ変格の中に

入れべき詞なるをまだらく下二段の活にあげおく
といれたり猶考ふべし おのれさきにおもひしは ことを言幸舎の翁の考格の
中に入べき詞といれたるはうべなひごとし考格
といへとも他の行の音のましろことは絶てなきこ
となりけれは音転の詞の例のごとおもへと彼一種の
詞は物の形状にあきて事業にかゝはりたることの
彼ノ詞に活くことはあらぬことなるにこの得といふ
詞は則業をいふ詞にてさとな音雑のくしきと活く
は志より同韻のきに活ききより同音のくに活くを
この得を由平ノ音とみるときはゑより下には音は
さとなり韻も異にして流ノ音の一行を中間に隔たれ
ば音雑の詞の例なれはいとく異なり故おもひけらく
は下二段は本音を除きて九行の活用にて得といふ
詞の活の別は一行あるなればあらぬ見されば九行の音
限りなく広く種々の詞の活あれども此の得はこの
詞の外なるこの行の活詞なきにても別にこの活ある
みなはあらぬことをしるべし かくて得と云詞はもと
ゑ(ウケ)の二音の約りたる詞にて父音にてうけうくと活

けるを詞の約にてゑゐと成れるならむと思ひしが又
よくおもへば宇の(ゐ)は五十音義をもて考ふるに必
和行の宗ノ音なること然なれば和行のゐとはけと約
りては宇ノ音にて得のゑ音なるに協ひがたし然れば
この詞の活用のことは、いかにとも考へえがたし後ノ人ノ
よく考へてよき考あらんことをまつのし

この巻は嘉永二年の夏陸奥遠田郡涌谷ノ伊達安藝云が
方にてはじめて草稿をおこして同三年戌四月甲斐國都留郡
上野の原北関にて中書し安政元年寅冬同國八代郡市川にて
補正し同二年卯十一月同國御嶽の社中にて清書し同四
年巳十二月同國巨摩郡逸見の筋穴山村にて改正す

大日本帝國圖書印

国立公文書館
National Archives of Japan